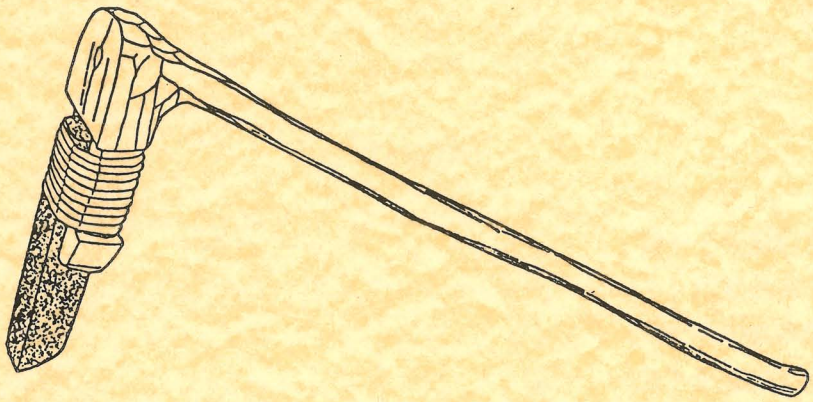
大使町文化財資料　第40集

太子町山田字小丸山遺跡採集の弥生遺物

－佐野清輔氏採集による－



横斧復原模式図（弥生文化の研究５より）

１９９４年１月

太子町教育委員会

例言

1　本書は、太子町山田在住の佐野清輔氏により、同町山田字小丸山において採集された遺物の報告書である。

2　遺物の調査・整理にあたっては、佐野清輔氏、伊藤慶子、岩村千穂、小山真紀、中村豊子各氏の協力を得た。

3　本書の執筆・編集は、三村修次、海野浩幸が担当した。

本文目次

例言
はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
遺物の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9

挿図目次

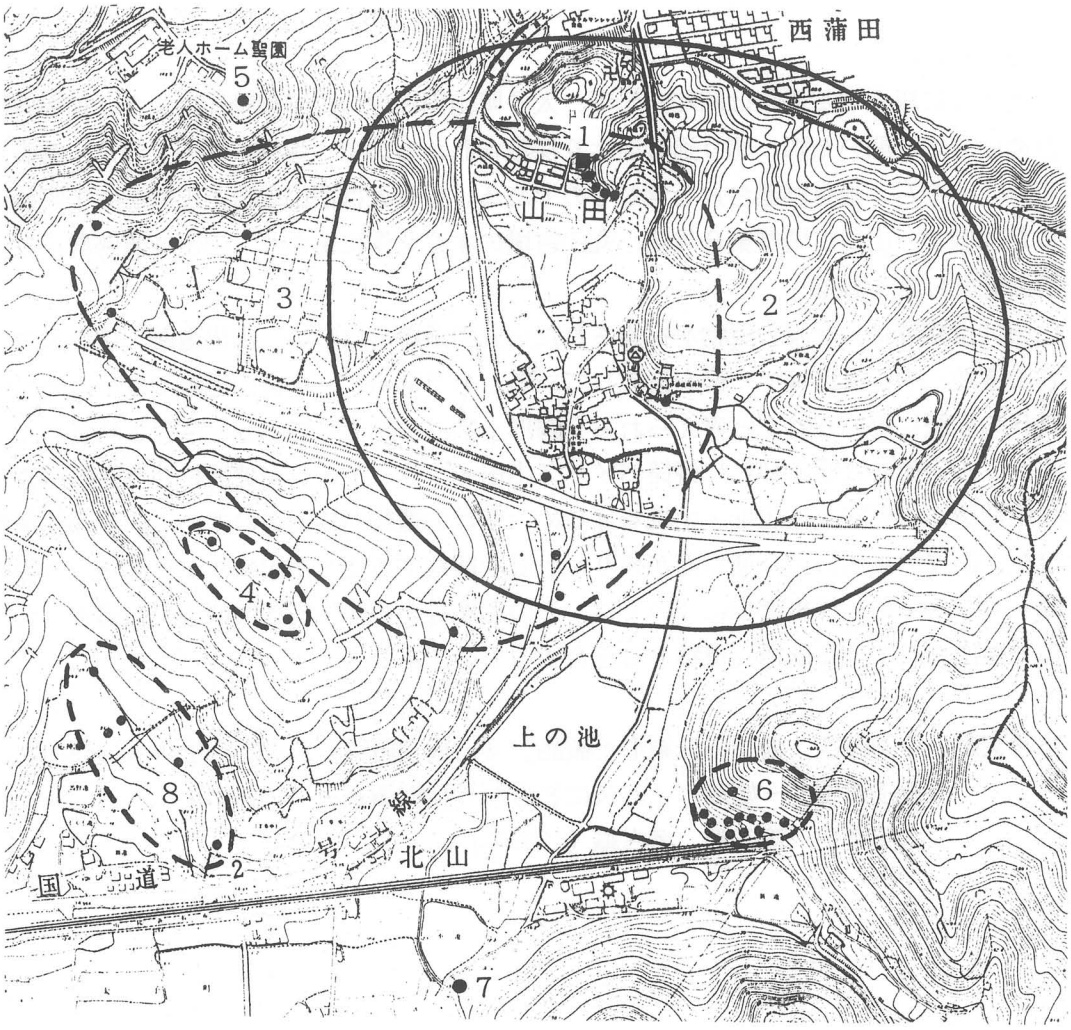
第1図　周辺遺跡分布図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第2図　遺物実測図（1）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
第3図　遺物実測図（2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
第4図　遺物実測図（3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
第5図　遺物実測図（4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

表目次

表1　石器観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
表2　土器観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8

図版目次

写真1　上　山田峠遺跡遠景（南から）
　　　　下　遺物採集地現況（西から）
写真2　上　柱状片刃石斧
　　　　下　磨石



第１図　周辺遺跡分布図（S=1/10,000）

1　遺物採集地点
2　山田峠遺跡群
3　山田古墳群
4　北山古墳群
5　聖古墳
6　白毛古墳群
7　原北町古墳
8　郷ノ谷古墳群

太子町山田字小丸山遺跡採集の弥生遺物

－佐野清輔氏採集による－

1　はじめに

今回ここに紹介する遺物は昭和43年頃、太子町山田在住の佐野清輔氏により、納屋建築のため山を切り開いた際、切り通し面より採集されたもので、弥生中期の土器片、磨製片刃石斧、すり石、須恵器器台片を含むものである。採集地は旧山陽道山田峠を太子町側に下った西側で、山田古墳群第８号墳小丸山古墳のすぐ北側にあたり、山田峠遺跡群小丸山遺跡の範囲に含まれる。

山田峠遺跡群は、今回の遺物が採集された小丸山遺跡をはじめ、山田遺跡、桃畑遺跡、雁谷山遺跡、中山遺跡等で一群を形成しているものである。　小丸山遺跡では、以前に弥生時代の祭祀に用いられたと考えられる分銅形土製品が出土しており、注目される。

また、山田遺跡は昭和48年に姫路バイパス山田インターチェンジ建設に伴う発掘調査で弥生中期後半の竪穴式住居址・土坑をはじめ、多数の遺物が検出されている。遺物採集地は現在、納屋の裏側に切り通し面が残り、土層を観察することが出来たが、遺物包含層等は認られなかった。採集遺物については、その形態等から弥生時代中期後半の遺物として周辺で検出されている遺構、遺物とも符合するものである。

参考文献　今里幾次「播磨の分銅形土製品」『古代学研究』21･22 合併号（1959年）
山田遺跡　－姫路バイパスにともなう発掘調査－（1975年）
太子町史　第三巻　考古編（1989年）

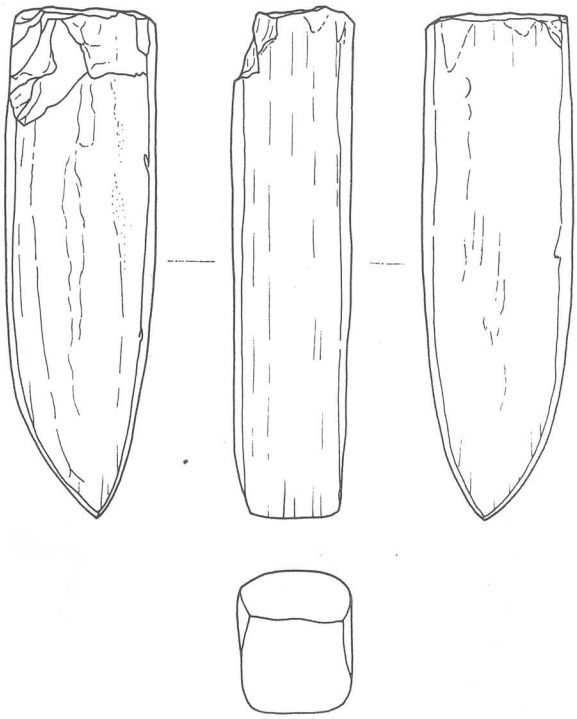
2　遺物の概要

採集遺物は、弥生時代中期後半を中心とした土器片94点と、石器２点、須恵器１点を含むものである。そのうち実測図化可能だったものは17点である。

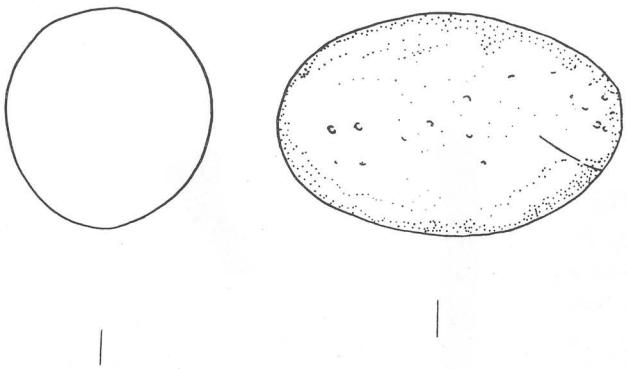
石器１は磨製柱状片刃石斧で、上端の一部を欠損している。石器２は磨石で、紡錘形を呈する。この遺物については北部九州を中心に分布が見られ、最近近畿地方でも発掘例が増加しつつある投弾の可能性も考えられる。

１・２・３は壷形土器の口縁部及び頸部、４・５は甕形土器の口縁部、６・７は鉢形土器の口縁部、８～12は高坏形土器の坏部、脚部及び脚注部、13～15は壷形土器或は甕形土器の底部である。16は甑の底部で焼成まえに穿孔されている。17は須恵器の器台の筒部である。

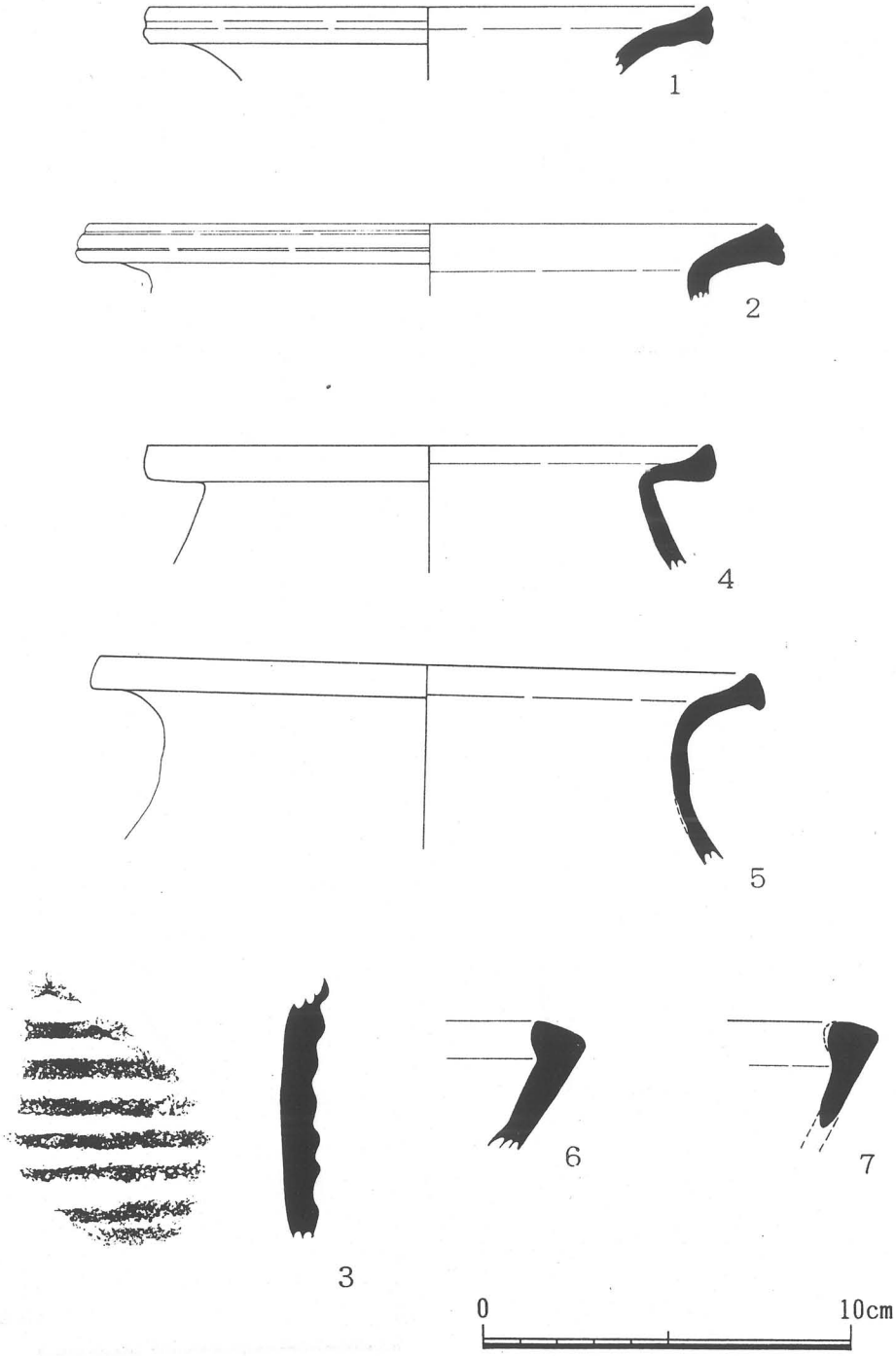
石器１



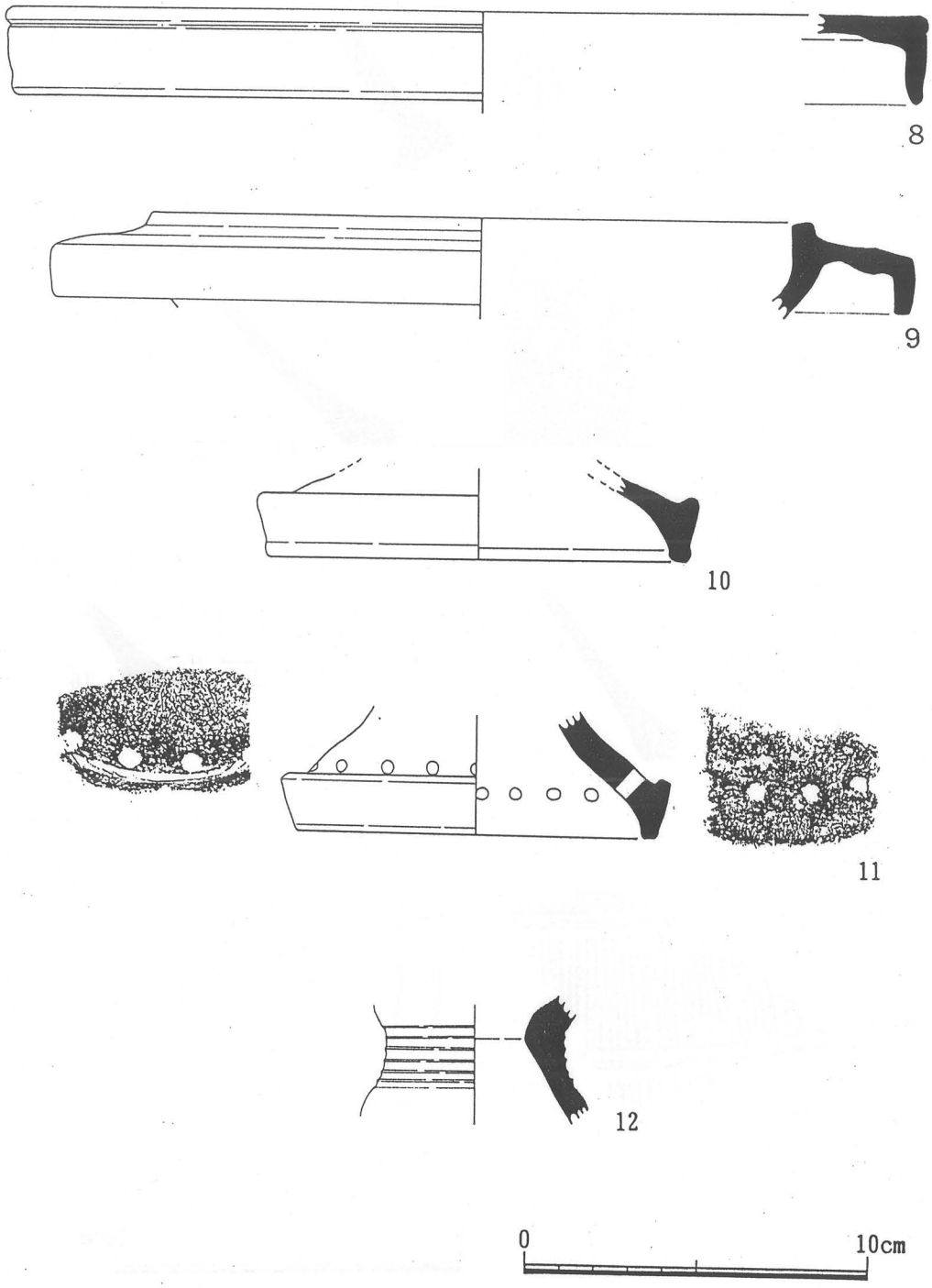
石器２



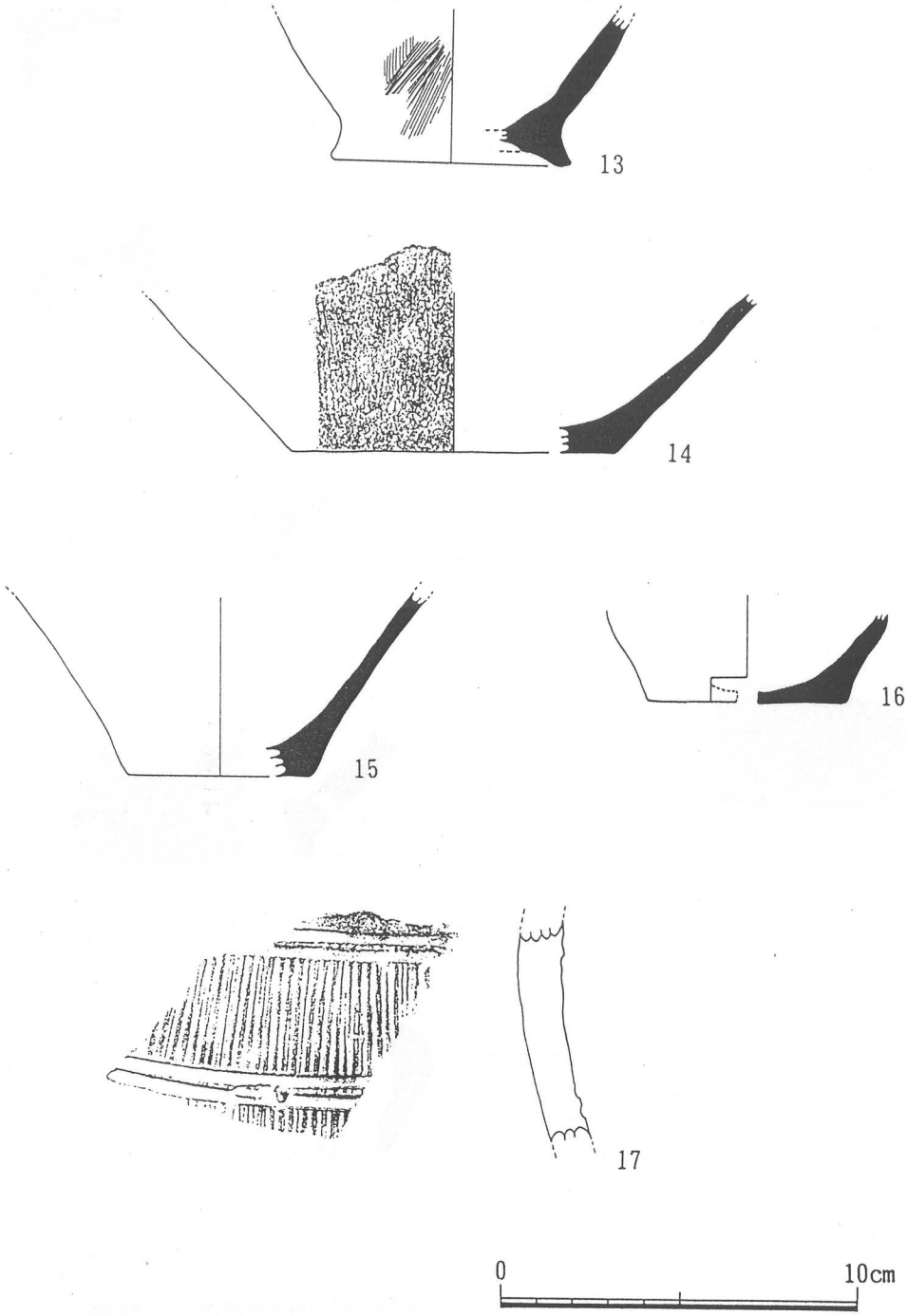
第２図　遺物実測図（１）



第３図　遺物実測図（２）



第４図　遺物実測図（３）



第５図　遺物実測図（４）

表１　石器観察表

番号	器　種	石　材	長さ	幅	厚さ	色調	備　考
1	磨製柱状片刃石斧	結晶片岩	13.2	3.0 刃部幅 2.5	4.0	暗緑灰	上端の一部欠損
2	磨石	砂岩	9.1	5.9	5.5	灰色	投弾の可能性有

※法量の単位はcm

表２　土器観察表

番号	器種	法　量	胎土 焼成 色調	形態及び文様	技法・調整	備考
1	壷	口径 15.3 残高 2.0	粗い 不良 鈍い黄橙	口縁は大きく外反し水平に開く 端面に一条の凹線を施す	摩耗のため調整不明	
2	壷	口径 18.5 残高 2.0	砂粒を含む 普通 橙	口縁は大きく外反し水平に開く 端面に二条の凹線を施す	口縁部内外面ともヨコナデ調整	
3	壷	—	微砂粒を含 良好 橙	頸部に太い凹線文を施す	摩耗のため調整不明	頸部
4	甕	口径 15.3 残高 3.5	0.1 ～0.3の砂粒を含む 不良 明黄褐色	水平に開く口縁をもつ 端部は上方に若干つまみ上げる	摩耗のため調整不明	
5	甕	口径 18.0 残高 5.0	粗い 普通 明黄褐色	口縁部は内面に綾をもって外反する 端面は下方に拡張する	摩耗のため調整不明	
6	鉢	口径 39.0 残高 3.0	微砂粒をわずかに含む やや甘い 明黄褐色	端面はほぼ水平面をもち端部は内側に拡張する	摩耗のため調整不明	
7	鉢	口径 37.0 残高 3.0	微砂粒をわずかに含む やや甘い 明黄褐色	端面はほぼ水平面をもち端部は内側に拡張する	摩耗のため調整不明	
8	高杯	口径 26.7 残高 2.7	密 良好 鈍い黄橙色	口縁部は水平にのびて端部が直に垂下 外面に一条の凹線を施す	水平拡張部外面はヘラミガキ 外面内側はヨコナデ	
9	高杯	口径 19.0 残高 2.8	砂粒を含む 良好 淡赤褐色	口縁部は水平にのびて端部が直に垂下 内面突帯はやや内傾する	水平拡張部外面内側はヨコナデ 内面はヘラミガキ	
10	高杯	底径 12.4 残高 2.5	小石粒を含 明黄褐色 良好	裾端部は肥厚し上下にゆるく拡張する	外面ヨコナデ 内面は摩耗のため調整不明	

※法量の単位はcm

番号	器種	法　量	胎土 焼成 色調	形態及び文様	技法・調整	備考
11	高杯	底径 15.5 残高 3.5	微砂粒をわずかに含む 明黄褐色 外面黒斑 良好	裾端部は肥厚し上下にゆるく拡張する 下部に全周を巡ると推定される円孔が３個現存する	外面ヘラミガキ 裾部はヨコナデ 内面ヘラケズリ後ナデ	
12	高杯	残高 2.8	微砂粒を含 黄褐色 良好	外面に横位のヘラガキ沈線を６条施す	内面ヘラケズリ	
13	底部	底径 6.6 残高 4.0	小石粒をわずかに含む やや軟質 灰褐色	上げ底状　側縁が斜下方へ張り出すタイプの底部	外面はハケメ 内面はナデ 側縁部及外底部はナデ	
14	底部	底径 9.0 残高 4.5	0.1 ～ 0.2 の砂粒を含 良好 外面黒褐色 内面淡褐色	平底（中央部は欠損） 体部へは直線的に斜上方へ立ち上がる	外面　12本/1cmの細いハケメ 内面摩耗のため調整不明	
15	底部	底径 5.0 残高 5.0	0.1 ～ 0.2 の砂粒を含 やや軟質 明黄褐色	平底（中央部は欠損） 体部へは直線的に斜上方へ立ち上がる	外面ミガキ 内面摩耗のため調整不明	
16	甑 底部	底径 5.6 残高 2.5	0.1 ～ 0.2 の砂粒を含 やや軟質 明黄褐色	平底底面中央に焼成前に外→内への穿孔を穿つ	外面ミガキ 内面摩耗のため調整不明	
17	須恵器 器台	—	微砂粒をわずかに含む 堅致 灰色	縦向きの櫛目の後ヘラによる凹線を２本１セットで巡らす	外面縦方向の櫛目及凹線 内面ヨコナデ	器台の筒部

※法量の単位はcm

3　まとめ

山田字小丸山遺跡の詳細については、今後の調査を待たなければならないが、今回紹介した遺物により、同遺跡の性格の一端をうかがいしることができたものと考えられる。

最後ではあるが、遺物の調査・実測を快く承諾して下さった佐野清輔氏に記して感謝したい。

山田峠遺跡遠景（南から　⬇が遺物採集地点）

遺物採集地現況（西から）

柱状片刃石斧

磨　石